

中央大学 会計人会 会報

発行所 中央大学会計人会

東京都台東区上野1-9-4

平川税務会計事務所内

発行人 会長 平川 忠雄

編集人 広報担当 前川 和義
副会長



会報の発刊に際し 会計人会の発展を期して

会長 平川 忠雄

このたび、中央大学会計人会会報の発刊に当たり、会計人会の発展と拡充を願い、会員の先生方ともども努力をつくしていきたいと存じます。

中央大学会計人会は、本学卒業生の学員のうち専門職種としての公認会計士、税理士等の職業会計人の会員で構成され、30有余年の歴史をもつ組織であります。また、大学学会の「会計人支部」として認知されている団体でもあります。

この長い期間、我々の先輩諸先生の献身的努力により支えられてきた組織を引継がせていただいた現役員一同、一層の発展、継続拡大のための活動をすすめているところであります。

目標の第一は、会員数の拡充を図り組織としてのパワーを蓄えることを目標としています。

職業会計人数では、他大学に比して上位を占める中央大学としてその全員加入があれば、活動力

が高まり、大学への寄与も拡大するとともに会員相互間の組織的メリットが向上するからであります。

しかして、今日の情報化社会において職業会計人は、常に情報第一線において活動する立場にありますので、中大OBのネットワークを利用した情報伝達をすすめたいと考えています。

その広報としての目的をになう「会報」がここに発刊され、その第一歩を踏み出しました。

現在、登録会員1,500名を超え、会員名簿の電算入力も完了し、また、会費収入も着実に入金さ

れつつあります。

そして大学学会会の一員として大学との接触を深め、経理研究所との連帯をすすめ、教職者と実務家との「双利共生」の理念を定着していきます。

さらに他大学会計人会との交流を活かし、業界への位置づけを高めたいと考えています。

これら目標の達成は、会員先生方の御協力によって成り立つものであります。尚一層の御尽力を賜わりたく心より御願い申し上げ、あわせて会員先生方の御発展御健勝を祈念いたします。



会報の発刊に寄せて

中央大学学長 外 間 寛

中央大学会計人会が「会報」を発刊されることとなりました。心よりお祝い申し上げます。関係者のご努力に対し深甚なる敬意を表します。

中央大学会計人会は、30有余年の歴史と伝統を誇り、計理士、公認会計士、会計士補、税理士として活躍されている会員数も1,500名を超え、平川会長を中心に今後益々発展させ、充実させていこうと大変張り切っておられると聞き及んでいます。

本学に対しても平素から教育研究振興基金等への多額のご寄付をはじめ様々な機会にご高配、ご厚情を賜わっています。衷心よりお礼を申し上げます。特に、公認会計士、会計士補、税理士を志す学生諸君に対する物心両面の温かい思いやりに深く感謝しています。

本学は、創立以来、我国の法曹・会計人等の職業分野における人材養成について大きな役割を果たしてきました。この実績が実学を重んずる本学の誇るべき伝統となっています。我々は、これを継承し、そして益々発展させていかなければなりません。

もつとも、今日の本学は総合大学であり、実学一辺倒ではありません。実用を直接の目的としない学問分野の研究教育が多面的かつ広範囲に展開

されています。人類の知見を広げ、思索を深めるという純粋な学問上の営為が大学の質を高めています。新しい総合政策学部は、新しい学問体系を打ち立てようという野心的な構想のもとに設立されました。既設の学部にも新学科が増設され、また大学院問題についても鋭意検討が進められているなど、いま本学は総合大学として大きな飛躍をとげようとしています。

本学がどんな新しい姿に脱皮するにせよ、しかしその中に実学の伝統を適切に位置づけなければならないと思います。他の学問、そして新たな学問の進展に留意しつつ、実学も益々自らを洗練していかなければならないでしょう。そうすることによって、国家・社会の必要とする専門職業の世界に、より良い人材を提供することができるよう努力を続けていきたいと思っています。

最後に、中央大学会計人会の益々のご発展と会員の皆様方のご活躍、ご健勝を祈念致します。





会報の発刊を祝して

中央大学経理研究所長 渡部 裕 亘

今般、中央大学会計人会の会報が発刊されましたことを心からお祝申し上げます。また、この発刊に際し、お祝いの言葉を申し述べる機会を与えていただきましたことは、私のこの上もない光栄とするところであります。

中央大学会計人会が職業会計人の方々を中心に学会の支部として創立されてから、30有余年が経過しようとしています。この間、会員相互の研鑽と親睦を通して斯界の発展に努めてこられたことは勿論であります。中央大学に対しても多額の寄付等によって多大の貢献をしてこられたのであります。そして、この度は、会報を発刊するなど積極的な活動を展開されております。これは、平川会長を始めとする役員の方々のご尽力の賜と存じます。関係各位に対し深甚の敬意を表するものであります。

この機会に、経理研究所の現状について若干触れさせていただきたいと存じます。ご存じのように、経理研究所は、かつては公認会計士・税理士などの職業会計人を多数養成してきましたが、大学紛争や多摩移転などを契機として変容を余儀な

くされ、現在は、駿河台記念館で社会人を対象とした会社経理・税務・資金管理などの実践講座、コンピュータ講座、簿記講座および研究会形式のA (ACCOUNTING) & B (BUSINESS) フォーラムを開設し、多摩校舎で学生を対象とした簿記会計講座と公認会計士講座を設けています。駿河台記念館では、大学が社会に開いた窓として、社会人教育に専念しています。各種の実践講座には、平川会長を始め会計人会の皆様にご講師としてご助力をいただいております。多摩校舎では、公認会計士を目指す学生を対象に、簿記の初歩から公認会計士第二次試験合格に至るまでの教育を大学の正規の授業と両立するように配慮し、課外教育の一環として行っています。最近では、受講する学生が増加し、日夜勉学に励んでおります。

諸先輩におかれましても、今後とも後輩の養成と経理研究所の運営に一層のご助力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に会計人会ならびに会員の皆様のご益々のご隆盛とご活躍を祈念し、お祝いの辞とさせていただきます。

担当副会長の報告と抱負

総務

担当副会長 荻野 弘 康

平成6年4月20日午後4時より中央大学駿河台記念館において定期総会を開催した。司会は総務担当が行い、会長挨拶の後、平川会長が議長席につき議題の審議に入った。

議事に先立ち、議長は議事録署名人に前川和義、小林陽二両名を指名した。

第1号議案「事業報告」は、担当副会長から役

員会活動、会員活動、大学学会、友好団体関係等が報告された。

第2号議案「収支報告、貸借対照表」は、神山副会長から報告がなされ、田中左門常任監事より「監査の結果適正であった」旨の監査報告ののち、両議案とも満場一致で承認された。

ついで第3号議案「事業計画」について担当副会長から説明がなされ、第4号議案「収支予算」について神山副会長から同じく説明がなされたのち、両議案とも満場一致で承認された。

第5号議案「会則の一部改正案」について担当

副会長より、会則第6条を「本会の会費は年額1万円とし、毎年9月末日までに納入することとする。」また会則第16条に「本会の慶弔の規定は、理事会の議を経て別に定める。」を新設したい旨を説明ののち、議場に凶ったところ、それぞれ満場一致で承認された。

ついで各部報告に移り、大江副会長(組織担当)から会員名簿の作成状況、会員の増強運動について、神山副会長(財務担当)から事務局のあり方等財務の立場から提言があり、前川副会長(広報)から創刊号と次号の発行について、山田副会長(研修担当)から研修会、セミナーについて、それぞれ報告がなされた。

定期総会終了後、本年度の税制改正について「パネル・ディスカッション」が行われ、平川会長、大江副会長、山田副会長がそれぞれ要点説明をなし、交互に意見交換を行い、出席会員の実務に大いに参考になる内容で好評であった。

懇親会には、井上顧問、富岡教授、渡部経理研究所所長をはじめ、友好団体からご参加いただき、それぞれ有益なご挨拶を賜り、和気あいの内に旧交を温めて終了した。

財務

担当副会長 神山敏夫

平川忠雄会長による新体制が発足した時に、副会長に任ぜられ、その後の役割分担で、財務担当をお引受けして、早や1年が経過しました。

我が中央大学会計人会は、一昨年30周年の記念すべき祝典がありましたことは、記憶に新しいところですが。

現在、本会の登録会員数は、1,500名を優に超える大所帯となりました。今年度は、会報の発行、会員名簿の発行、研修会の開催等活発な活動を計画しております。財務担当といたしましては、このような活発な活動を支えるための軍資金の調達が一番気になるところですが、これは、会員の皆様方の会費で賄う以外方法がない訳です。以前に

は、終身会費の制度があったのではなかったかとの疑問も出されましたが、いずれにしろ、手元不如意では何もできません。そこで、昨年の総会において、年会費を1万円として会員の皆様をお願いすることとし、平成5年度は、332名の会員のご協力を頂き、お陰様にて、財政的基盤が整って参りました。但し、このような任意団体での年会費については、正直なところ、集まりにくいのが実情です。

会員の増強を進めながら、一方では、未納会員に対しては、どう対応するのか考えさせられる難問が生じます。

前述のように、平成6年度の事業計画では、会員名簿の発行費に多額の予算を見込んでおりますし、会報の発行や研修会開催等にも相当の予算措置を講じております。

これも、有意義な活動をすることによって、会員の皆様が会費という形で自然に本会を支えて下さるものと思います。

会則では、9月末日までに年会費の納入をお願いすることになっています。振替依頼書が着きましたらよろしくご手配下さい。

部の報告がお願い事に終始してしまいましたが、これも本会の永続と活発な活動を願っての事とお許し下さい。

なお、平成5年度収支報告及び平成6年度収支予算は後掲の通りです。

組織

担当副会長 大江晋也

中央大学会計人会も平成4年10月21日に30周年を迎え、記念式典を挙行することができました。これは、ひとえに諸先輩の並々ならぬご労苦と伝統の賜物と深く感謝申し上げる次第であります。

今後は、平川会長のもとに、役員一同が伝統を守りつつ、さらなる発展をすべく努力する所存であります。

組織部の業務については、二つあります。

第一は、会員名簿の作成、第二は、会員の増強と組織の強化です。

第一の会員名簿については、「会員名簿小委員

会」を設置し、横須賀博小委員長のもとに、目下、旧名簿をベースにして、組織委員会の委員全員で見直し作業を行なっているところでもあります。

第二の会員の増強と組織の強化については、「会員増強小委員会」を設置し、小林陽二小委員長のもとに、会員名簿の作業が完了次第、税理士会の組織および公認会計士の組織を活用して、会員増強の運動を進めていく予定であります。

会員1,506名のマンモス会である中央大学会計人会は、会則第3条の「会員の相互親睦と職業会計人としての資質の向上と学術の研鑽を図ると共に、母校の振興に寄与することを目的とする。」の趣旨にもとづき、平川会長のもとに、組織部は一致協力していく所存であります。

おわりに、組織部のメンバーは、横須賀博、小林陽二、桑原裕、原田実、岡崎和雄、宇佐美一雄、望月寿夫の諸先生で、今後の組織部の活動をおこなってまいりますので、ご協力のほどお願い申し上げます。

研 修

担当副会長 山 田 淳一郎

「平成5年度研修報告と

6年度計画について」

“会員のための研修会を積極的に開催しよう”と意気込んで迎えた平成5年度でした。

平成5年4月には定期総会開催前の機会を活用しまして、中央大学教授富岡幸雄先生を講師にお迎えし「国際課税の問題点」のタイトルで御講演を頂戴し、多くの会員に御出席戴きました。

有意義な御講演に、出席下さった会員も大変喜んで下さいました。ありがとうございました。

正副会長会において、引き続き平成5年秋にも研修会を開催する方向で検討致しましたが、平成5年度は名簿作成確定作業等を優先することにしたので、秋の研修会は実現できませんでした。

平成6年にはいりまして、4月1日、常任理事会と観桜会の間の時間にミニセミナーを開催致しました。

「平成6年度税制改正」をテーマに、パネルディスカッション方式により、パネラーは富岡幸雄

先生、平川会長、大江副会長、山田の4人で行いました。

中央大学の会計人会らしく、改正内容に対して大変活発な意見が述べられました。

特に公益法人課税、使途秘匿金課税、交際費課税に対しましては富岡先生、大江副会長の両氏から辛口の意見と批評もあり、また、改正点について実務上の留意点に関するポイント解説もあり、短い時間ながらも充実した面白いパネルディスカッションが開催できました。

パネラーの先生方、どうもありがとうございました。

尚、4月20日には税務大学校教授の大淵博義先生を迎えた税実務研修会を持とうと計画しておりましたが、準備、段取りが悪かったこともあり、実現に至りませんでした。研修担当としまして反省しているところです。

当日は、再びパネルディスカッション方式によるミニセミナーを開催致しました。

平成6年度には次のような研修会を開催しようと企画しておりますので奮って参加戴き度々お願い申し上げます。

- ① 平成6年秋頃 「テーマ 未定」
- ② 平成7年2月上旬 「平成7年度税制改正」

広 報

担当副会長 前 川 和 義

4月20日開催の定期総会に間に合わせるべく「準備号」を発刊しましたところ、本格的な会報の発行を望む声が大変高くなって参りましたので、ようやく今回の発刊に漕ぎつけました。

但し「準備号」でもお願いしております新会報の名称については、未だに1件の御意見も到着しておりませんので、従来通りとなりました。またその他のご投稿も期待してお待ちしておりますので、是非々々貴重なご意見をお寄せ下さるよう改めてお願い致します。



平成5年度 収支計算書

平成5年1月1日から平成5年12月31日まで

中央大学会計人会

【単位：円】

支 出 の 部		収 入 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
通 信 費	212,684	通常会費収入	3,320,000
会 場 費	766,707	親 睦 会 収 入	630,000
渉 外 費	210,000	雑 収 入	90,000
消 耗 品 費	209,733	受 取 利 息	2,048
雑 費	23,126	当年度収入合計	4,042,048
当年度支出合計	1,422,250	前年度繰越金	1,908,877
次年度繰越金	4,528,675		
支 出 合 計	5,950,925	収 入 合 計	5,950,925

貸借対照表 (財産目録)

平成5年12月31日現在

中央大学会計人会

【単位：円】

科 目 (内 訳)	金 額
I 資産の部	
1. 現 金	7,805
2. 銀行預金等	
(1)三菱銀行 中野支店 (普)No.4451431	48,517
(2)安田信託銀行 神田支店 (普)No.1227297	216,519
(3)振替貯金 外神田六郵便局 No.東京5-28490	90,000
(4)さくら銀行 上野広小路支店 (普)No.5321671	4,165,834
資 産 合 計	4,528,675
II 負債の部	0
差 引 正 味 財 産 有 高	4,528,675

平成6年度 収支予算

平成6年1月1日から平成6年12月31日まで

中央大学会計人会

【単位：円】

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
名簿作成費	1,000,000	通常会費収入	5,000,000
会場費	800,000	親睦会収入	800,000
通信費	700,000	雑収入	100,000
事務局費	600,000	利息収入	50,000
消耗品費	500,000		
会報費	500,000		
渉外費	300,000		
研修費	200,000		
広告費	100,000		
委員会費	200,000		
雑費	50,000		
予備費	300,000		
当年度支出合計	5,250,000	当年度収入合計	5,950,000
次年度繰越金	5,228,675	前年度繰越金	4,528,675
支出合計	10,478,675	収入合計	10,478,675

私の大学時代

——校舎より山へ通った四年間——

昭和37年商学部卒 税理士 岩田克夫

山のたより

3月下旬のある日、後輩のMから電話。『今発売中の「岩と雪」No.163号'94年4月号に、先輩の山の記録が紹介されています。』そして、今晚Kと共に訪ねたいとの申し出であった。

Mとは2年前の5月、エベレストやアンナプナ山群をトレッキングの案内してもらい、Kはこの正月チベットへ。ヒマラヤの山々を北面から眺めるため同行した。二人とも、大学を卒業して10年近い歳月を、未だ山へ情熱を燃やし、「世界の山旅、辺境の旅」の案内人をしてしながら、Mはエベレスト、Kは今に残り少なくなった7,000m級の処女峰の登頂を夢見る愛すべき山男たちである。

登山遍歴

山との出会いは、疎開先の北海道、上川郡鷹栖

村。「山の幸」の採取目的だった。中学時代、山好き教師に連れられ、東京近郊の山々や、日光白根山、尾瀬、蓼科山等に登り、都立一商山岳部に入った。

大学入学と共に、高校山岳部OBの屯する昭和山岳会へ入会した。

「岩と雪」（登山の専門誌で、山と溪谷社から隔月出版）の記事は、大学3年（昭和36年）3月から4月、劔岳北方稜線の記録を中心に、大学4年、3月の黒部十字峡横断に触れたものだった。

劔岳北方稜線は、法政大学山岳部が昭和57年2月から4月までの46日間、21名の部員、キャンプ7、総重量1,300kgとヒマラヤ登山を模して極地法で初めて成功させた記録である。

私たちは、2人、100kgの荷。ノンデポ（荷上げなし）、ノンサポート（支援隊なし）のためダブルボッカ（2回に配けての荷運び）、ノンテン

ト(重量を省くためテントを持たず、イグルー〔エスキモーの氷の家〕、雪洞の利用)の40日間、宇奈月から劔岳(法政大は往復)、立山、薬師岳、槍が岳、穂高岳へと縦走する計画。しかし、28日間、立山一ノ越で下山した記録である。

一方、黒部十字峡横断は、昭和37年3月、前年の反省の上に4、5人のパーティを予定したが、4～5年以上の冬山経験者は、14日間の休みはとれず、結局、先輩のKと2人、自営の先輩Sと3人の一年生の4人の支援を得て成功した記録である。(詳細は、山と渓谷1962年6月号)

学生生活

中大の入学試験は、2月初め、明治大学等より10日以上も早かった。合格通知を待ちかねて、春山へ行った。

同じ高校から4人の同級生を得、学生証は恩典のため紛失届で、二枚。一枚は友に預けっぱなし。彼の履修科目に準拠。お陰で、スペイン語や中南米経済事情という単位もとらされた。友が、数少ない女子学生に岡惚れし、尻を追い、それに追隨した結果であった。

大学3年、ヒマラヤに憧れ、その夢を追った。年間120日から150日の山行きの間に情報を集め何とかもぐりこもうとした。全日本山岳連盟のヒマラヤ遠征隊員に先輩が選ばれ、集荷、梱包等の手伝いをし、4年生の時、ノミネートされたとき、あの至福の数ヵ月は忘れられない。当時の遠征は、文部省の学術予算中の外貨割当のため、12,000ドルの申請が、8,000ドルに削られると、最年少隊員の私は、あっさり在京を申し渡されたのである。

登山今昔

「岩と雪」によれば、「北方稜線、十字峡をとともにトレースした京大山岳部と昭和山岳会の対比は、そのまま'70年代のヒマラヤに投影することができる。初登頂の冠詞は京大のためにこそあり、初登攀のそれは社会人山岳会の誉れである。」

「昭和山岳会の二人の記録が現代でも十分通用する山行であるのと比べると、他の大学山岳部の記録は見劣りする。それは集団から個への大きな流れを示すものである。」

「60年代の山岳界はまことに華々しい。大学山岳部員たちも本当にまじめに山に登っている。そして、ヒマラヤへ憧れている。彼らは、戦前の大学エリートと戦後の岩壁スペシャリストの間で、本当の意味でアルピニズム再興を果たした岳人たちではなかったろうか。」(和田城志)

30数年を経て過分とも言える評価を受けた。

名門、早稲田大学山岳部ですら部員数、10名に満たないことも劔岳遭難で知った。大学山岳部の衰退は、現代日本社会の投影ではないか。一文の得にもならず、他人に頼まれもしないのに黙々と登るのは、自分の喜びのために、自己中心的な強烈なエゴの持ち主でなければ、先鋭的な登山はできない。昨今の若者達の登山離れは、エゴの衰弱を意味し、妙に協調的でそして利害に敏感な、優しい若者(?)の増加は、戦後50年も続いた平和な社会の負の所産と見るのは私ばかりでなければよいが……。

その夜、遅くまで、杯を手に若い二人と語り合った。

編集後記

月日はめぐり再び盛夏を迎えました。
卒業以来、何度目の夏になりましょうか。
この度、中央大学会計人会の会報を復刊することになりました。
永い間休刊しましたので実質的に創刊号と言えると思います。

そこで創刊号にふさわしく平川会長の挨拶のほか、外間学長、渡部経理研究所長の祝辞を賜わり有難うございました。

このほか担当副会長から、それぞれ報告と抱負を述べて頂きました。

今後は会員相互の連絡と親睦に役立つ機関誌にして行きたいと思いますので、会員の多面にわたる積極的な投稿をお願いします。